
赤と青の神話 二章

深江 碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤と青の神話 一章

【Zコード】

Z3275Y

【作者名】

深江 碧

【あらすじ】

森の化け物を退治できなかつた三人は、南の王の下に歸つてくる。そこでクロフは王に懇願する。自分に一年の猶予が欲しいと。その間に、腐つた土地を開墾し、作物の実る土地にしてみせると。王は条件を飲み、クロフは数人の奴隸と共に土地を耕し始める。やつと二章です。もう正直、どこの文章から直せば良いのかわからないです。よつて、そのままに近い形で載せてします。読みにくいかもしれませんが、よろしくお願ひします。

二章 光と影

城下町では三人の馬が遠くの荒野に見えると、民衆は三人の英雄が化け物を倒し、無事返ってきたと思いこんだ。

そしてその姿を一目見ようと門に詰めかけた。

そのため彼ら三人が城門に着く頃には、屋台や露店が軒を連ね、大通りに人があふれ、城下町はお祭り騒ぎだった。

南の国の民は森の化け物が退治された喜びに沸き、街は明るい雰囲気に包まれていた。

フィエルナ姫は、城壁の前で未来の夫となる若者を不安と期待の入り交じった面持ちで出迎えた。

戸惑つたのは三人の方だった。

城壁の前で姫や街の人々に出迎えられ、どう応えていいのかわからなかつた。

フィエルナ姫が安心したように、馬上のクロフを見上げ尋ねた。
「皆様がご無事で何よりです。森の化け物はさぞ手強かつたでしょう？ お怪我などされませんでしたか？」

クロフが困ったように頭をかき、馬から下りようかと迷っていると、ヒーネが馬から飛び降り、フィエルナ姫に駆け寄つた。

「ええ、そうなのですよ、姫。わたしは一人を従え、あの恐ろしい森へと入つていつたのです。しかし化け物めはわたしが来ることが前もつてわかつていたのか、恐れをなして森中に罠を張り巡らせたのです」

フィエルナ姫は不安そうに胸の前で両手を組んだ。
ヒーネはその白い手を取つて握りしめる。

「しかしわたしは勇敢に進み、数々の罠をかいぐぐり、数多の難題

を解決し、森の奥へと進んでいったのです。すべては姫と南の王様のため。わたしはそれだけを思い、戦い抜いたのです」

馬上のクロフはヒーネの話に聞き入っているフィエルナ姫や街の人々を見回し、隣の馬に乗っているケーデインを肘でつついた。

「今のうちに王の館に戻りましょう。あなたの目の怪我もありますし、領主様とも急遽相談したいことがあります」

クロフは城門の前の人々に気づかれないように、こっそりと馬を進め、城壁を回り込んだ。

城壁の石壁にそつて歩き、クロフは裏門を目指す。

クロフは目が見えないながらも不機嫌な顔で後ろを付いてくるケーデインに話しかける。

「もしも、すべて本当に上手くいったら、この土地も元に戻り、あなたの田も治るかもしれません」

今まで口を引き結び黙り込んでいたケー＝ディンはゆっくりと顔を上げる。

「本当か？」

馬の歩みに揺られるようにして、クロフは黙つたまま「」つしひつした城壁の石垣を眺めている。

「すべて、上手くいったら、ですよ。もちろん、そんなに上手くいきつこないことくらい、ぼくにもわかっているんですけどね」

クロフはそれきり口を閉ざした。

城壁を渡る風が荒野の草花を揺らし、青空の彼方へと吸い込まれていった。

苔むした日陰の道を通り、一人は鉄格子のはまつた裏門にたどり着いた。

門の前には一人の衛兵が鎧甲を身につけ、槍を構えて立っている。クロフは衛兵にケー＝ディンの怪我のことを話し、裏門を開けさせた。

門を通り、白い石柱の立つ中庭に出たところで、ケー＝ディンは感心したようにつぶやく。

「あなたの口の上手さもなかなかのもんだな。あの貴族のぼつちゃんと受けを取らないくらいだ。まあ、あなたの方はぼろを出さないだろうがな」

ケー＝ディンは手綱を握り直し、口元に笑みを浮かべる。

森から帰ってきて以来、初めて見せた和らいだ表情だった。

「嘘は付いていません。ただ必要なことしか口に出していないだけです」

クロフは苦笑いを返す。

白い石畳の敷き詰められた中庭を抜け、二人は城の入り口に馬を止める。

クロフは城の小姓と二面、三面言葉を交わし、馬の手綱を手渡した。

召使いに案内され、二人は城仕えの薬師の部屋に通された。通された先は薬草の匂いが立ちこめる、薄暗い部屋だった。天井や部屋の壁には様々な色の植物がつるされ、赤い炎の揺らめく炉には大きな鉄鍋がかけられている。

薬師は白髪の瘦せた老人だった。

二人の怪我を見るなり、棚から毒々しい薬の壺を取り出す。

二人とも打ち身や擦り傷だらけだったので、薬師の塗ってくれた塗り薬が傷に染みて危うく悲鳴上げそうになつた。

薬師が目を見張つたのは、大蛇の毒液を受けたクロフの腕とケーディンの両目だった。

クロフの手首からひじまで、炎に巻かれたように赤く焼けただれ、ひどい水ぶくれを起こしていた。

「こんな大怪我で、お主、よく今まで平氣じやつたのう」

薬師の話を聞いてケーディンは顔色を変える。

「おい、お前、そんな大怪我を、どうして今まで放つておいたんだ！」

ものすごい剣幕で怒鳴られ、クロフは笑いを返す。

「手持ちの薬草は限られていましたし、あなたの両田の処置のほう
が大事でしたから」

こともなげに言い放つ。

「だからってな、お前！」

ケーディンはクロフに詰め寄ろうとしたが、白髪の薬師に止めら
れる。

「怪我人同士が喧嘩するでない。そっちのひょろつここのの怪我は、
骨まで溶けていないのが不思議なくらいの重傷だし、筋がいくらか
切れているから、多少の不便が出るかもしれないな」

薬師は部屋の隅の清潔な白布を持ってきて、それを広げる。

「ここのでかいのはかなりの重傷だな。両田とも視力を失つておる。
わしの持っている薬草や、過去の文献からでは、こいつの両田を治
すのは不可能じやな」

わかつていたことは言え、いざ田の前ではつきりと告げられ、
ケーディンは肩を落とした。

治療が終わると、二人は老薬師に礼を言つてその部屋を後にした。
長い城の石畳の廊下に一人分の靴音が響く。

城にはほとんど人の気配が無く、薄暗く静まりかえっていた。
窓の外の城下町の方からは、人々のにぎやかな声が風に乗つて聞
こえてくる。

「あの貴族のぼっちゃんはまだ城門のところにいるのか？ 森の化
け物も退治していいのにいい気なもんだ」

ケーディンはクロフの肩を借り、ゆっくりと薄暗い廊下を歩いて
いく。

「森の化け物について触れられたら、彼はどう答えるつもりなんで
しょう？」

クロフは苦笑いを浮かべる。

「さあな。貴族どもの考へることは、いまいちよくわからん
ケーディンはどうでもいいことばかりにまき捨てる。

クロフは廊下を進み、曲がり角を曲がる。

城内の召使いがほとんど出払っているため、領主の部屋までの道のりは、二人の記憶だけが頼りだつた。

しかしクロフは立ち止まつたり、長く迷つたりする事はない、

廊下を進んでいった。

「おい」

三つ目の曲がり角を曲がつたところで、ケーディンが声をかける。

「お前、せつとき言ったことは本当なんだろうな？」

クロフは足を止め、わずかに顔を上げる。

「城門の外で言つたことだよ。おれの田が上手くいけば治るとか、何とか。あれは本当なのかな？」

クロフは一瞬だけためらつよつて、光の差し込む窓の外を眺める。

「ええ、そうです」

ケーディンの口から喜びの声が漏れる。

「やつた、本当か？」

クロフはしばらくの間黙り込む。

「しかし、それはとても困難なことです。下手をすれば、あなたの両目は永久に治らず、ぼくも命を失うことになるかもしれません」

ケーディンは喜びの声を慌ててのどの奥に引っ込める。

その時、ケーディンの両目はすでに光を失っていたため、その時クロフがどんな表情をしているか、赤金色の瞳に絶望にも近い暗い炎を映しているのにも、もちろん気づかなかった。

「詳しく述べませんが、それはとても長い時間がかかるかもしれません。それでもいいですか？」

ケーディンは少しの間考える素振りをしていたが、大きくうなずく。

「まあ、ちつとはおれもため込んでいたしな。故郷に帰つて、妹や弟達とつましく暮らせばしばらくは何となるだろ？」

ケーディンは豪快に笑う。

ケーディンの明るい様子を見て、クロフの口元にも笑みがこぼれる。

それからしばらくの間、ケーディンのたわいない話が続いた。

両目が治ると聞いて、氣分が高揚していたのだろう。

彼はもっぱら故郷に残してきた妹や弟達のことについて話した。荒野のヒースが夏の太陽を受けて紫色に染まる頃、故郷に戻るといつも一番最初に蜜蜂達のうるさいくらいの羽音でむかえられるという。

早くに両親を病で亡くし、長兄である彼が妹や弟達の面倒を一度に見てきた。

彼は家計を助けるため、村を出て様々な仕事をやってきた。街から街に移動するうちに、生まれ持った体格の良さと腕つ節が認められ、地方の権力者の護衛などを務めるようになつた。

森の化け物の「わざ話はその時に聞き、一日ももつとやつてき

たといふ。

クロフはケーディンの話に相槌を入れ、廊下を歩きながら聞いていた。

しかしその横顔に時折ひどくうれつな表情が浮かんでいたのを、盲目のケーディンは気付かなかつた。

領主の部屋の少し手前まで来ると、クロフはケーディンから腕を放す。

「では、ここでお別れです。あなたは最初に領主の部屋を訪ね、森での出来事や、化け物についてのことを事細かに話してください。そしてその化け物に一太刀浴びせたこと、その代償に盲目の視力を失つたことを話してください。そうすればいくら薄情な相手であれ、人々の手前、いくらかの報奨金がもらえるはずです。あなたはそれを持つて故郷に戻つていてください」

ケーディンが抗議の声を上げる。

「おい、それは違うだろ！ 化け物はお前が」「いいんです」

クロフはゆっくりと首を横に振る。

「あなたがもうつてください。故郷で暮らすためにも、お金は多い方がいいでしょう?」

クロフはケーディンの肩を叩き、その背を押す。

ケーディンは廊下の壁に片手を置き、ぎこちない足取りで歩いていく。

「ありがとな」

ケーディンは背を向けたまま、小声でつぶやく。

クロフは黙つたまま、その大きな背中が扉の向こうに消えるのを見つめていた。

「森の化け物を退治したところで、作物の実らなくなつた土地は元に戻りません。それどころか、もつと悪い事態を招いてしまうかもしれません」

クロフは南の王と面会するなり、開口一番をいつづけた。

「では、どうすればいいのだ?」

王は椅子に座つたまま、額に手を当てる。

「無礼な頼みとは重々承知しておりますが、どうかわたしに幾人の農夫と家畜、何種類かの穀物の種をください。彼らと共に土地を耕し、昔のような豊かな土地に戻して見せます」

王の部屋にいた家臣達が一斉に顔を見合させる。

王は暗く重苦しい声で答える。

「しかし今までに何人の農民がその土地で作物を育てようとしてきたが、無理だったのだぞ。お前のような農民でもない者が、作物を育てても失敗するのは目に見えている」

部屋の窓から差し込む昼の明るい光とは対照的に、人々の顔には

暗い影が落ちている。

「今までそうやって甘言を弄し、わしに近づいて来た者は何人もいたが、誰一人として土地を元に戻した者はおらぬ。それどころか、奴隸や家畜を持って逃げる者や、途中で行方知れずになる者ばかりだ。お前がそうならない保証はあるのか？」

クロフは何も言わなかつた。

重苦しい沈黙の中、赤く燃える炉から薪のはぜる音が響く。

「わかつた。数名の奴隸と、数頭の家畜、穀物の種を与えよう。しかし、ただでと言うわけにはいかぬ。何らかの物品と引き替えだ」

王はクロフの身なりをじろじろと眺め回した。

クロフの身なりはただでさえみすぼらしいものだった。
森の化け物との戦いの折、服のあちこちは泥で汚れ、破れたままになつてゐる。

「わたしの与えられるものは、たつた一つしかございません」

クロフは強い意志のこもつた赤金色の瞳で領主を見つめた。

「それは、わたしの命です」

王はそれを聞くなり、部屋中に響くほどの大声で笑い転げた。

家臣達の間からも忍び笑いが漏れる。

「命？ 命と言つたか？ 言うに事欠いて命とはな。これは面白い」
クロフは王の笑いが収まるまで目を伏せ、黙りこくつっていた。
「では一年だ。一年の猶予をお前にやろう。それまでに何の成果も現れなければ、お前の命とやらをもらつとしよう。来年の春を楽しみにしているぞ」

王は傍らに控えていた召使いを呼び、クロフに数人の奴隸と家畜、穀物の種など、必要と思われる物をそろえさせた。

最後に出発するときになつて、監視役として衛兵一人を伴わせた。

「あの者が逃げぬよう、くれぐれも監視を怠るな」

クロフは一時の休息も取らず、追い立てられるように奴隸や家畜を連れて城を出発させられた。

太陽が西の荒野に差しかかる頃、うち捨てられた村に行はたどり着いた。

森に化け物が住み、大地の腐敗がすぐそばまで迫つてきたため、村人が逃げ出し、人の住まくなつた村だつた。

石壁の家々の扉は開け放たれ、水瓶には水が残り、冬用の薪や鉢に植えられた植物がそのまま置いてあつた。

納屋には作業用の鍬や、家畜用のわら、大麦といった食料がそのまま残してあつた。

クロフは村で一番の大きな家に奴隸達と一緒に泊まり、残つていた薪を燃やして暖を取つた。

城でもらつたいくらかの大麦のパンを炉の火であぶり、納屋に引き入れておいた家畜の乳をしづおり、それらを暖めて夕食とした。奴隸だからといって、クロフは彼らを区別することはしなかつた。パンを均等に分け、五人の奴隸に平等に行き渡るようにした。

南の王に命じられ付いてきた衛兵一人は、部屋の隅で別々に食事を取っていた。

次の日の朝早く、村から少し離れたぬかるんだ土地にたどり着いた。

元々畑や牧草地だつた土地は、地の底から氣泡が湧き、辺りには鼻をつくような悪臭が漂つてゐる。

その土地には木らしいものは生えておらず、ぬかるんだ平野には葦が伸び、ごつごつした沼地がどこまでも続いていた。

クロフは奴隸をそこで一端休ませ、馬に乗つて平野や丘の向こうを見に出かけた。

いくらか進むと、小高い緑の木立が眼前に広がつてゐる。

そこが一帯を沼地に変えたという大蛇が住む森だつた。

クロフは緑の森から田を背け、沼地とそうでない土地との境目に馬を進めた。

馬を進めるうち、沼地が森を中心にほぼ田形に広がつてゐることに気が付いた。

沼地を一巡りして戻ってきたクロフは、奴隸達と共に沼地を掘り返し始めた。

クロフには吟遊詩人になるため、神殿で教えられた様々な知識があつた。

土や植物に関する知識もその一つだった。

クロフはその知識を生かし、土地を蘇らせようと考へた。

しかしそれが長い時間を必要とし、とても困難なことは、クロフにもわかつていた。

クロフは土を調べ、どうすれば土地を蘇らせることが出来るのか、その土地で育てられる作物は何かを調べ始めた。

それから毎日、クロフは奴隸達と共に土を耕し、作物の種をまき、牛馬の世話をし、そこから肥料を作つて畑にまいた。

夜明けと共に起き、日が暮れるまで働き、うち捨てられた村へ戻る生活が続いた。

領主に命じられてクロフの様子を見張つていた衛兵は、ある満月の夜にクロフが村から出て行くのに気が付いた。

クロフは足音を忍ばせて馬に乗り、森の方角へ向かつていいく。

衛兵はお互いうなづき合つて、クロフに気付かれないように後を追つた。

クロフは森の端まで来ると、馬の手綱を木の枝に結び、松明を片手に森へと足を踏み入れた。

衛兵はしばしためらつた後、後を追つて月の光さえ届かぬ暗い森へと入つていった。

クロフは松明をかかげ、ぬかるんだ道を通り、森の中央にある湖へと向かう。

途中、生い茂った枝や、岩に足を取られつつも、クロフは湖にたり着いた。

クロフが湖の岸辺に到着するなり、月を映していた水面が波立ち、渦を巻き始めた。

渦の中から姿を現したのは、銀のうろこを月光にきらめかせた一匹の大蛇だった。

大蛇はクロフをちらと見、呆れたようにつぶやく。

「また懲りもせず来たのか。数日ごとにこの湖を訪れては、竪琴をつま弾き、世間話をしては帰つて行く。お前はここへ何の理由があつて訪れているのだ？」

大蛇は青い目を細め、松明の明かりに照らされたクロフの顔を見下ろす。

「別に特別の理由があつて訪れているわけではありません。あなたと話がしたいから来ているだけです」

クロフは岸辺の岩の上に腰掛け、松明を岩との割れ目に立てかける。

「ぼくは土地を元に戻す方法を探しているんです。あなたなら、その方法をご存じかと思って」

「それでわたしの機嫌取りか。ふん、いい身分だな」

大蛇は呆れたようにつぶやく。

クロフは背負つた竪琴を下ろし、音を確かめるように指で弦を軽く弾く。

そしておもむろに竪琴の音色に合わせ、歌い始めた。

クロフの歌声は夜風に乗り、辺りの森に響き渡る。

月の光が降り注ぐ湖面を揺らし、闇に溶ける木々の葉をざわめかせた。

豎琴の音は時として白々とした月の光のようつに澄み渡り、時として松明の炎のように明るく夜空を照らし出した。

クロフは一つの詩を歌い終えると、豎琴を背中に戻し、大蛇に頭を下げる。

「では今夜はこれで失礼します。月の神シンドウが夜の安らぎをもたらすように。また次の晩会いましょう」

クロフが湖から馬のところへ戻る途中、奇妙な声が木々の間から響いてくる。

耳を澄ますと、それは人の声のようだつた。

クロフは声のする方に松明を掲げ、照らしてみると、衛兵二人が泥の中に腰まで沈んでいた。

三ヶ月が過ぎ、季節が夏に変わるまで森には何の変化も表れなかつた。

クロフが耕した土地にはわずかな作物が実り、草木も少しづつ生えるようになつていた。

初夏を迎えたある日。ヒーネが兵士を引き連れて森の側までやってきた。

ヒーネは土を耕しているクロフを見つけると、馬の上から糞むような目つきで見下ろした。

「君も大変だねえ。こんな土地を耕して何になるんだ? 化け物を倒せば、すべては解決するのに。土地を耕すのは無駄な努力だよ」

ヒーネはクロフの耕した縁の畠を見ようともせず、さつさと兵士を引き連れて行ってしまった。

クロフは言い返すことさえせず、また畠を耕しに戻った。

それから数日後。

夜中に湖を訪れたクロフは、夜風に血の臭いが混じっているのに気が付いた。

クロフは何も言わず、豎琴で悲しげな曲をつま弾いて、彼らの鎮魂歌の代わりとした。

大蛇は青い目を細め、黙つてクロフの詩に耳を傾けていた。

季節は巡り、その度ごとに何組もの討伐隊が森へやってきた。

「化け物を倒しても、土地は元には戻りません。どうか討伐を考え直してはもらえませんか？」

クロフは彼らを説得しようと言葉をかけたが、誰一人としてクロフの言葉に耳を傾ける者はいなかつた。

秋になり、クロフは畑で実った作物を収穫し、ささやかながら収穫祭を祝うことが出来た。

牛の丸焼きや、果物、蜂蜜酒は無かつたが、奴隸達や衛兵も加わって、大きなががり火を中心に行進や踊りをして楽しんだ。

この時ばかりは、クロフも皆の前で豎琴を弾きならし、明るい曲を演奏した。

祭りは明け方まで続き、そこにぎやかさは森にいる大蛇のところまで届き、彼女に呆れられるほどだった。

やがて長い冬が訪れ、再び明るい春が巡ってきた。

作物が育たないと言われた沼地は開墾され、草木が生い茂り、作物の種が芽吹いていた。

南の王に申しつけられた一年という期限は、目の前だった。そんなある日。

クロフ達が耕している畑の前を、白い衣を着、馬に乗った神官達が通りかかった。

クロフはその先頭を行く若い神官に見覚えがあり、畠仕事の手を休めまじまじと見つめた。

かつてクロフと西の神殿で共に学んだ数少ない同年代の友達だった。

若い神官はクロフの姿に気付いたのか、一団から離れ、クロフのいる畑の真ん中までやってきた。

白い頭巾の下からのぞく鋭い瞳は氷のように冷たくクロフを見下ろしている。

「お前、こんなところで何をやっている。神殿を飛び出し吟遊詩人になつた次は、農夫の真似事か？」

神官はところどころで作物の新芽が芽吹いている畑を見回した。

「口キウスこそ、こんな場所までやって来るなんて一体どういった用です？ この先には沼地と、森と丘しかありませんよ？」

「おれはその森に用があるんだ」

北からの冷たい風が二人の間を通り抜けた。

春先とはいえその風は雪のよつに冷たく、クロフの頬には刺すようを感じられた。

「なぜ、森になんて用があるんです？」

クロフは心の動搖を表に出さないよつに努めた。

「お前がいつまでも化け物退治をせず、神殿に戻つてこないからだ。国民の窮状を救うのが神殿の務め。業を煮やした神殿はおれを派遣

し、一刻も早い問題の解決を望んだのだ
ロキウスはクロフを鋭い目でにらむ。

「森の化け物を退治しても、問題は解決しません!」

クロフは声を張り上げる。

それはクロフが煙を通り過ぎる化け物退治の者達に何度も話して聞かせたことだつた。

ある者は一笑に付し、ある者は哀れみの目差しを向け、通り過ぎていった。

クロフはロキウスとの付き合にも長かったので、彼がクロフの言葉に耳を傾けないであろうこともよくわかつていた。

ロキウスはクロフの言葉を無視し、続ける。

「化け物の一件が片付いたら、お前には西の神殿に戻つてもらひ。神殿では問題が山積している。いくら神殿を逃げ出したお前でも、役に立つことはいくらもある」

クロフは黙つてロキウスの去つていく後ろ姿を見送つた。
足元には、ロキウスの馬に踏みつぶされた作物の新芽が土に埋もれていた。

月が中天にかかる頃、クロフは皆が寝静まつたのを見計らい、馬に乗つて一人村を抜け出した。

クロフは通り慣れた道を進み、森の湖へ向かう。いつもと違つていたのは、クロフが松明さえ持たず、無意識のうちに走つていたことだつた。

茂みをかき分け、クロフは空の開けた湖にたどり着いた。辺りに人の気配はなく、月の光を受けて湖は静まり返つていた。クロフは安堵の息を吐き出し、おもむろに岸辺に近づいた。空にはおぼる月がかかり、黒い雲がたなびいている。

クロフが岸辺に近づくと、水面が盛り上がり銀の大蛇の姿を取つた。

青い瞳がクロフの頭上から星のように見下ろしてくる。

「今夜はどうした？ 見たところ息も上がつてゐるようだが。何かあつたのか？」

「ええ、少し」

クロフは息を整えながら、近くの石に腰掛けた。おぼる月が黒い雲に隠れ、辺りは一瞬間に包まる。

クロフの心の曇りは晴れず、どんどん不安が募るばかりだつた。「どうした？ やはり何か心にかかることがあるのだな？ もしわたしに話して楽になるのなら、話してみたらどうだ？」

予想外に大蛇に優しい言葉をかけられ、クロフは目を丸くした。初めて大蛇と出会つた時の対応を考えれば、雲泥の差だつた。それはこの一年の間、クロフがたびたび湖を訪れ、豎琴を弾き詩を詠い、話をしてきたためだつた。

それが大蛇の心の氷を溶かし、安らぎをもたらしたのだ。クロフは息を吐き出し、大蛇に事の次第をぽつりぽつりと語り始めた。

知り合ひの神官が、明日にでもこの湖にやって来て、大蛇を殺そうとすること。

ぬかるんだ土地を奴隸達と共にこの一年間、耕し続けたこと。
南の王に定められた期限がもうすぐやつてくれる」と。

クロフが話す間、大蛇は黙つて聞いていた。

青い瞳は暗く沈み、何事か考えているようだつた。

話し終えたクロフは岩の上から揺れる水面を眺めていた。

「それで、お前の真意はどこにあるのだ？ その知り合ひの神官を、
わたしに殺されたくないというのが、お前の本心か？」

クロフは答えなかつた。

赤金色の田を細め、おぼろ円が水面に映つてゐるのをぼんやりと
眺めている。

不意に黒雲がおぼろ円を隠し、湖は再び闇に閉ざされた。

「保証は出来ない。しかし努力しよう」

クロフは驚いて顔を上げる。

辺りが再び光りを取り戻したときには、大蛇の姿はどこにもなかつた。

クロフは晴れない気持ちを抱えたまま、村に帰り着いた。床に潜り込んだクロフは、昼間の仕事の疲れのため、大蛇の言葉を深く考える余裕もなく眠りに落ちた。

それから一日が経ち、領主の定めた期日がやつてきた。

南の王はお供の家臣とフイエルナ姫を引き連れ、馬に乗つてクロフの耕した土地を見に訪れた。

王はきれいに耕され、うねの出来た畝を見て感心した。

しかしそれは全体の沼地の半分にも満たないわずかな土地だけだつた。

王はその時になり、クロフにほうびを与えるのが惜しくなつた。また無理な要求を与えれば、この若者は応えてくれるだろうと考えたのだ。

「確かに前の言つたとおり、この土地は元に戻つた。だがそれはほんのわずかだ。残り一年の間に、すべての土地を元に戻し、森の化け物も退治して、わしのところに来るがいい。その時こそ、姫もほうびも思いのままだ」

王は内心クロフを快く思つてなかつた。

愛娘のフイエルナ姫が彼に好意を持っているのも、気に入らない理由の一つだつた。

クロフは背後にいる奴隸達を振り返り、声を張り上げる。

「わたし達はこの一年の間、一生懸命働いてきました。すべての土

地ではないにしろ、沼地だつた土地を元の豊かな土地に戻しました。わずかな報酬も休息も与えられないまま、わたし達に馬車馬のように働けと言つのですか？」

南の王はクロフの言葉に聞く耳を持たず、馬上から冷ややかな目で見下ろしている。

「お父様。彼らはお父様のために、ここまで土地を耕し、作物を植えてきたのですよ。心ばかりのほうびを貰え、城でもてなしてやってもいいのはありませんか？」

フィエルナ姫が控えめに意見する。

王はフィエルナ姫の言葉に考えを改めたらしく。

「わかった。ならば今宵は城で宴を催そう。今夜ばかりは何もかも忘れ、貴賤の差も気にせず、宴を楽しむがいい」

王は馬を返し、クロフに背を向いた。

「では、クロフ様。今宵宴の席で会いましょう」

フィエルナ姫はクロフに会釈して、南の王の後に続く。

他の家臣達も馬を歸し、畠にはクロフと奴隸たちが残された。まだ畠の上を吹く風は冷たく、生えそろつた新芽のあぜの間を音を立てて吹き抜けていった。

その晩、城に到着したクロフは、宴の場にロキウスの姿があるのに驚いた。

それは相手も同じだつたらしく、ロキウスも目を丸くしてぼろぼろの服を着たクロフの姿を見つめている。

「このような席によくお前が顔を出せたものだな。化け物退治一つ満足にこなせないような、お前が

「どうして」

クロフは白い衣をまとつたロキウスをまじまじと見つめた。

ロキウスは冷ややかな笑みさえ口元に浮かべ、蜜酒を一息に飲み干した。

「どうして、とはな。おれがあのまま化け物にやられて、くたばる」とでも思つたのか？

「違う」

クロフは目の前が暗闇に覆われたような気がした。

ロキウスは手に持つた杯を近くの給仕に差し出し、注いでもらう。

「彼女は、彼女はどうしたんだ？」

「彼女？」

ロキウスは片眉をつり上げ、不愉快そうに息を吐き出した。

「ああ、あの大蛇に化けていた女のことが。あの女だつたら、神官達の炎に巻かれてもまだ息があつたのでな。神殿への報告のために、今はこの城の地下の牢屋に閉じこめてある」

クロフはそこまで聞くと、広間の扉へ向かつて駆けだした。

「おい、待て！」

背後から口キウスの呼び止める声が聞こえる。

クロフは立ち止まらず、広間から飛び出した。

廊下を通り、階段を一足飛びに駆け下りる。

クロフは無我夢中で走り続け、気が付けば薄暗い地下牢にたどり着いていた。

松明の灯りがちらちらと揺れ、どこからか水の滴る音、罪人達のうめき声が木靈している。

クロフは牢番の兵士に頼み、大蛇に化けていたと言う女のいる牢屋を案内してもらつた。

一番奥の頑丈な鉄格子の向こう、闇の中から青い瞳が射るようにこちらを見つめている。

「きみが、あの大蛇なのか？」

松明の炎に照らし出された姿は、クロフが思つた以上に小さく痛ましい姿をしていた。

年の頃ならクロフと同じくらい。

黒くぼさぼさな髪をした色白の娘だった。

「ならば、なんだと言つんだ？」

娘は低い声で不機嫌に答える。

奴隸の身につけているぼろをまとい、手足は枯れ枝のように細く、無数の擦り傷や切り傷がいたるところに見られる。

クロフが口を開くより前に、背後にいた牢番が口を挟む。

「まさか、森の化け物が、こんな小汚い娘だったとは思いませんでした。神官様に退治していただいて、これで一安心です。でも気をつけてくださいよ。下手に近づくと、この娘に呪いをかけられるかもしれません」

案内してきた牢番は身震いして、逃げ出すように立ち去った。

牢の前に取り残されたクロフは、食い入るように青い田の娘を見つめている。

「どうした？ わたしのこのような姿が、そんなに珍しいのか？」

娘は疲れたように息を吐き出した。

「いえ」

クロフは言いかけて口をつぐんだ。

放心しているような顔を見て、娘は忍び笑いをもらす。

「相手が人間だと思つて、少し油断したらこの様だ。わたしを魂ごと滅ぼすことは出来なかつたが、神官達の魔法の炎で散々な田にあつた」

疲れたような娘の表情には、どこか諦めの色があった。

もうこのまま自分がどうなつてもいいという、深い絶望の気持ち。クロフは炎に照らし出された娘の横顔にその気配を感じ取つた。

「あなたは、どうして大蛇の姿をしていましたのですか？」

クロフはためらいながら尋ねる。

「どうして、とは？ あの大蛇の姿がわたしの本当の姿かもしれないと？ 今の姿は人間達を油断させるためにしている姿とは、考え

ないのか？」

「それは、考えませんでした」

クロフは照れくさそうに笑う。

それから娘から視線を外し、早口に話す。

「ええと、実はぼくは西の神殿に下された太陽の女神様の神託で、ここにたどり着いたのです。太陽の女神様の神託では、詳しいことまでは教えられなかつたのですが、ぼくにはあなたが人の姿をしていると思ったのです。これはぼくのただの望みかも知れませんが。一度も会つたことのないあなたの姿を知つているというのは、変だと思うかも知れません。でもぼくは太陽の女神様を信じていましたし、神託には

「待て」

娘はクロフの言葉を手で遮る。

「つまり、お前は太陽の女神の神託を頭から信じ、自分のことを知りたいがために、わたしを探していたというのだな？」

娘は青い瞳に怒りを宿し、声にも険しい響きが混じる。

「どいつもこいつも、自分のためか。人間とは愚かしいな」

クロフには娘がなぜ急に怒り出したのかわからなかつた。

彼にとつては太陽の女神の神託が自分の信じる道であり、神殿の教えが彼のすべてだつた。

「わたしがお前の正体を知つてゐるというのは、嘘だ」

娘は氷のような一言を返す。

「お前は何か勘違いをしているようだな。わたしがお前の正体を知つてゐる？ 太陽の女神の神託？ 今までそんな馬鹿みたいなことを信じ、ここまで來たというのか？ 本当におめでたい奴だな」

娘は口元に冷笑を浮かべ、クロフを嘲つた。

「ならば教えてやる。お前は火の神クルスス。お前の役目とは本来は、わたしと対になるもの。火は水と相争うもの。お前が森の湖で剣を持ったとき、自分でない何かを感じなかつたか？ それこそが本来のお前。天上の神々さえ忘れてしまつた原初の火の神の姿だ。火の神は普段は人間の生活を助け、温もりと安らぎを与えるが、一度荒ぶれば、森を焼き、生き物の命を奪い、その熱と光ですべてを灰にする。現に、お前は湖でわたしを死の淵にまで追いやつたではないか。それが天上の神々の意志であると、なぜわからない？」

湖で聞かされた言葉がクロフの胸に蘇る。

『神々の命で、わたしを殺しに来たのか！』

その時には痛まなかつた胸が、娘の口から発せられるたびに鈍く痛む。

「違う！ 太陽の女神様の神託では、あなたを探し、助けよとのお告げで」

神託を否定されてしまつたら、クロフを支えていたもの、信じていたものが、音を立てて崩れていつてしまつ。

光も差さない暗闇にクロフは放り出されるような気分だった。

「太陽の女神とて万能ではない。道を違え、神託を間違えることもあるだろう。ならば聞こう。お前は太陽の女神の神託を守り、お前の正体を知り、わたしを救つたところで、いつたい何の得があると言つんだ？」

それはクロフが今まで目を背けていた部分だつた。

「それは」

クロフは言葉に詰まる。

「答えられないだろう？　お前がそのつまらない神託を信じたせいで、わたしを殺して得られるはずの神々の栄誉も、地上で得られる名誉も、報奨も、姫の愛情も、お前はすべてを失つたのだぞ」

娘の一言一言にまるで呪いがかけられているかのよう、「クロフの心を傷つけ、切り裂いた。

クロフは黙つて娘の顔を見つめていた。

ちらちらと松明の炎が揺れ、石畳には長い影が出来ている。

長く重苦しい沈黙が辺りを支配する。

「それで、もしあなたの言つてることが本当だとして、その後、あなたを殺した後、ぼくはどうすればいいのですか?」

クロフは震える声で尋ねる。

「さあな。自力で火の神として天上に戻るか、このまま地上に残つて人間として生きるか、お前の好きにするがいい」

娘は素っ気なく答える。

クロフは口を開いたが、もはや何を言つていいのかわからなかつた。

おぼつかない足取りでクロフは壁にもたれかかりながら、階段の方へと歩いていく。

「吟遊詩人様、大丈夫ですか?」

クロフの青白い顔を見た牢番が心配して近寄ってきたが、クロフには彼の姿など見えていなかつた。

ただ歩くだけで精一杯だつた。

彼の目には何も映らず、彼の耳には誰の声も届かなかつた。どこをどう歩いたのか、気が付けばクロフは城壁の上に立つていた。

冷たい風が彼の赤い髪を揺らし、夜空には青白い月が妖しい光を投げかけている。

クロフは虚ろな目で夜空を振り仰いだ。クロフの赤金色の瞳にわずかな生氣が宿り、同時に底知れぬ闇が宿つた。

「夜を支配する月の神シン・ドゥよ。どうかぼくに安らぎを与えたまえ。平穀を与えたまえ。」
かすれた声でささやくなり、クロフは城壁から暗闇へと落ち込んでいった。

鉄格子の隙間から差し込む松明の明かりに、ディリーアはうつすらと目を開けた。

城での祝宴は夜通し続き、人々のざわめきがディリーアのいる地下牢まで響いてきた。

ディリーアは眠い目をこすり、ゆっくりと起きあがる。

地下牢には窓が無く、松明の明かりだけが唯一の光だった。

辺りは静まりかえっており、祝宴が終わつたということだけはティリーアにもわかつた。

目が覚めてから水の滴る音、松明のはぜる音を聞こえない。

牢番の兵士もどこかへ行つてゐるらしく、囚人達も普段と違ひ息を潜めていたようだつた。

ディリーアの背筋を冷たいものが駆け上つた。

両手を固く握りしめ、拳を額に押しつけた。

体はまだ震えていたが、からうじて正気だけは保っていた。

天上での月の神とのやり取りが、彼女の脳裏をよぎる。

周囲の耳の痛いほどの静寂に、彼女は覚えがあつた。

「月の神シンドウ」

ディリーアは体を両手で抱き、震えを止めようとする。

それは彼女が地上に生まれ落ちてから、森の化け物と呼ばれていた頃、何度も遭遇した気配だつた。

死に瀕した者に、月の神の使者が迎えに来るという話は、この国では一般的に信じられている話だつた。

そのため、月の神は夜の安らぎをもたらすと同時に、死の恐怖を司る神でもあり、人々には畏敬の念で崇められていた。

ディリーアはこの城内のどこかに、死に瀕した者がいると考えた。その気配をもつと詳しく感じ取ろうと、頭を軽く振り、こめかみ指を当てる。

そのうちに耳が痛いほどの静寂は消え失せ、周りの音が戻ってきた。

ネズミの鳴き声、人の声に混じつて、数人の靴音が近づいてくる。松明の明かりがちらちらと揺れ、数人の影が牢の前に立つ。

ディリーアはこめかみから指を放し、じつと鉄格子の外を伺う。松明に照らされたのは、森へ討伐に来たロキウスとみすぼらしい身なりをした五人の奴隸達だった。

「お前が、今更わたしに何の用だ？」

ロキウスは牢の中のディリーアを険しい目つきでにらみ付ける。

「そんな姿になつても、まだ一人前の口をきくが、化け物。お前の毒で何人の神殿の者達が傷ついたか、知らないわけではないだろう。本当なら今すぐにでもその首をはねてやるのだが、まあいい。今日はこの者達の頼みがあつてここに来たまでだ」

口キウスは後ろに連れてきた奴隸達を牢の前へうながした。

五人の奴隸は年齢も様々で、年端もいかない子供から、腰の曲がった老人までいた。

五人に共通していることと言えば、皆がみすぼらしい服を着て、

顔や髪、体が泥で汚れていることくらいだつた。

「おれ達は、クロフ様のもとで働いていた者です」

体格のいい男が牢の前に座り込む。

男は石の床の上に膝をつき、頭を低くする。

「どうかクロフ様の命を助けてください。どうかクロフ様の呪いを解いてやってください」

ディリーアは青い目を見開いた。

「クロフが、どうかしたのか？」

「はい、昨晩クロフ様は酒に酔つた勢いか、城壁から足を滑らせて、大怪我を負つてしまわれたのです」

腰の曲がった老人が答える。

昨夜のクロフとの問答がディリーアの脳裏をよぎる。

「城の薬師も、みんなさじを投げてしまわれたのです」「若い男が引き継ぐ。」

「だからクロフ様を助けてもらうために、こうしてあなたに頼みに来たのです。どうかクロフ様の命を助けてください」

ほつそりした女が牢の前に膝を付けて懇願する。

ディリーアは内心の動搖を抑え、黙り込んだ。

一番後ろに隠れていた奴隸の少年が、ゆっくりと鉄格子に近づいてくる。

「ねえ、お姉ちゃん。お姉さんはクロフ様を助けてくれるの?」

あまりにも率直に尋ねられたので、ディリーアは一瞬だけ本心を取り繕うのを忘れてしまった。

「ああ」

小さくうなずいた。その途端、少年の丸い瞳が喜びに輝いた。

「本当ですか?」

「それならば、クロフ様の命は助かるのですね?」

奴隸達は口々に喜びの声を上げる。

ただ一人、石壁にもたれかかっていたロキウスだけは、鋭い目付きでディリーアをにらんでいる。

「さつそく、クロフ様の寝室に案内しましょ。時は一刻を争うんです。神官様、早く牢の鍵を」

体格のいい男が石壁の側にいたロキウスを振り返る。

ロキウスは不機嫌そうに鼻を鳴らし、牢の前に歩いてきた。

「やはり、地下に住まう神々を崇める魔女だったか。生かすも殺す

も自由自在というわけだな」

ロキウスの小さなつぶやきを、ディリーラは聞き逃さなかつた。白い衣から牢の鍵を取り出したロキウスを、ディリーラは真っ向からにらみつける。

「誰が、あいつの怪我を治すと言つた」

ロキウスは鍵を開けようと/or>ていた手を止め、牢屋の中のディリーラを蔑むように見下ろす。

「あいつは、クロフは、城壁から足を滑らせたのではない。ましてや、わたしのかけた呪いなどであるものか。あいつは自分に、この世界に絶望して、自ら死を選んだのだ」

奴隸達の歎声も止み、辺りは再び静寂に包まれた。

「そんな男に、今更生きる価値などあるのか？ 命を取り留めたところで、生きる意志などあるのか？ それこそ時間と労力の無駄だ」

「貴様！」

ロキウスは手に持つていた杖で床を叩く。すると杖の先からは赤い炎が吹き出した。

ディリーアは炎を見据えたまま、鼻を鳴らす。

「所詮、神官でも力でものを言わせるか」

神官達の炎は森で何度も浴びせられたため、そのときの憎しみが心に舞い戻つてくる。

「もう一度、この炎で全身を焼かれたいか？」

「ふん、やれるものならやつてみるがいい。ただし、頭の固い神官共が、クロフを救うことが出来るならな」

「何を！」

ロキウスは杖の先の炎を鉄格子の間から差し入れた。燃えさかる炎が、ディリーアの顔を赤く染める。

「確かに、お前ならば今のわたしを殺せるかも知れない。だが、クロフのそばに月の神の使者が来ている。お前のような神殿の若僧に、月の神の使者を追い払うほどの力はあるまい」

「月の神の使者、だと？ 伝聞にある月の神の使者が、あいつのすぐ側に来ているというのか？ お前にはそれがわかるというのか？」

ロキウスの顔色が一変する。

「だったら何だというのだ？ 仮にわたしが地下の神々を崇める魔女であるのならば、それも当然ではないか。ああ、そう言えば。天上の神々の声を聞き、その使者の姿を見ることが出来るのは、最近では神殿の神官の中でもごくまれだと聞いたことがあったな。お前ほどの神官ならば、さぞかしあつきりとその姿が見えるのだろうな？」

？」

ロキウスは鉄格子の間に差し入れた杖を引き、牢の鍵を懐へ戻す。

「魔女の力など借りなくとも、あいつの命は我々の力で助けてみせ

るー。」

歯ぎしりさえ聞こえてきそうな顔つきで、ロキウスはティリーアをにらみつける。

白い裾を振り乱し、靴を響かせロキウスは牢屋から遠ざかっていく。

二人のやり取り眺めていた奴隸達は、ロキウスが去つていった先を眺め、顔を見合わせた。

「…………だそうだ。あいつの命は、お優しい神官様方が助けてくれるそうだ」

石床に両手をついたままでいた男は、ディリーアの顔を見上げた。ゆっくりと立ち上がり、ぼんやりした目差しで辺りを見回している。

「クロフ様は、助かるのか？」

体格のいい男は、同意を求めるよつよつぶやく。

腰の曲がった老人がうなずく。

「よかつた」

男は顔をくしゃくしゃにして腕を振り上げた。

奴隸達は随口々に喜びの言葉を叫び、牢の前を階段へ向かって歩いていった。

「これでいい

ディリーアは牢屋の石壁にもたれかかり、独り言のようにつぶやく。

すると一人残っていた奴隸の少年が、不思議そうに牢の中をのぞき込んでいる。

「何だ？ まだわたしに何か用があるのか？」

少年は何も答えず、じっとディリーアを見つめている。

「お姉ちゃんの青い目、とってもきれいだね」

ディリーアは呆気にとられた。

森に住むようになつて、人にこのよつな言葉をかけられたことなど、たつた一度しかない。ディリーアはそれを思い出し、胸が痛んだ。

「青くて、とつてもきれい。あのお兄ちゃんの赤い目も、同じくらいいきれいだったよ」

少年の言葉を聞いているうちに、ディリーアの目に温かいものがあふれてきた。

「すまない」

ディリーアは鉄格子に手を伸ばす。

「すまない、わたしのせいだ。全部、わたしのせいなんだ」

少年は小首をかしげる。

「どうして、お姉ちゃんが謝るの？」

ディリーアの頬を涙が伝い、その口から嗚咽が漏れる。

「泣かないで。泣かないで、お姉ちゃん」

子供は戸惑いながら、鉄格子の隙間から小さな手を差し入れた。

奴隸達が牢を去つてから、どのくらい時が経つただろう。ディリーアの頭の痛みは消えず、月の神の使者の気配も消えてはいなかつた。

それはすなわち、クロフの状態も変化が無いと言ひことだつた。ディリーアは痛む頭を押さえ、冷たい石の床に寝こんだ。ふつと目を閉じると、静かな暗闇が落ちてくる。

このまま消えてしまえたらどんなにいいか、ヒディリーアは考えた。

しかし静かな暗闇は、石の上に響く靴音にかき消され、長くは続かなかつた。

ディリーアは物音に顔をしかめ、のろのろと起きあがつた。靴音を響かせ牢屋の前までやつてきたのは、白い衣を着た中年の女神官だった。女神官はディリーアの牢の前で立ち止まり、鉄格子越しに見下ろした。

「どうか、クロフを救つてはくれないでしょつか？」

女神官は鉄格子に手をかけ、悲しげに目を細めた。
またか、とディリーラはため息をついた。

「クロフの命を救えるのは、あなたしかいないのです。そのための見返りは十分にいたしましょう。だから」

女神官は石の床に膝をつき、真っ直ぐな目で見つめる。

「どうして、わたしが」

ディリーラは青く冷たい瞳で女神官をにらむ。

女神官はディリーラの鉄格子の前から動こうとしない。

「それは、あなたが、太陽の女神の神託にある、水の女神であるからです。これは神殿内でも、ごく一部の者しか知らないことです。火の神の生まれ変わりであるあの子クロフと、水の女神であるあなたは、共に手を携えて同じ道を歩く存在であると、太陽の女神様はおっしゃっているのです」

女神官は鉄格子の前に拳を差し出す。

その手には牢の鍵が握られている。

「もしもあなたが彼の命を救ってくれるのでしたら、この牢から出してさしあげます」

ディリーラは女神官の手に握られた鍵を黙つて見つめている。

「わたしを牢から出して、素直にお前達の言つことを聞くと、本気で思っているのか？　お前が牢から出してくれた後、逃げ出すかも知れない、お前に斬りつけるかも知れない。そうとは考えないのか？」

女神官は辺りを見回した。

「たとえ、そうであつたならば、あなたの立場がますます悪くなるでしょう。あなたは、自分の立場をこれ以上悪くするほど愚かではないはずです」

ディリーラは肩をすくめた。

「そもそも、なぜわたしがあいつを助けなければならぬ。お前達神官が助ければいいだろ？ それともお前達は人一人満足に助けられないというのか？」

女神官は牢の鍵を握っていた手を引っ込め、うつむく。

「わたし達にあの子を救つてやることは出来ないのです。わたし達があなたを救う方法を見つけられなかつたのと同じように、あなたにしかあの子は救えないのです」

女神官は石の床にひざまずき、何度も何度も頭を下げた。白い衣が汚れるのもかまわず、頭巾からのぞく長い金の髪を石の上に散らす。

「お願いです。どうかあの子を助けてあげてください。お願いします。お願いします」

ディリーラは女神官から田をそらし、長い息を吐き出した。

「どうして、あいつのためにそこまでする。仮にも天上の神々に仕える誇り高い神官だろ？」

ディリーラはこめかみに指を当て、痛む頭を押さえる。

「あいつは、死という安らぎを求めているのかも知れないのに。なぜ、どうもこいつも無理に生かそうとする」

そのつぶやきに、女神官は動きを止めた。

「あの子が？ 自分から死を選んだというの？」

「さあな」

ディリーラはどうでもいいかのように吐き捨てた。

「わたし達は、火の神の宿命を背負ったあの子に、何不自由ない暮らしをさせてきたつもりです。詩も、学問も、生きるための知恵も、戦い方も、出来る限りのことを教えてきたつもりなのに」

女神官の瞳は虚空をさまよつ。

「強くあれ、優しくあれ、と育てていたつもりなのに」

ディリーラは女神官の独り言にも近いつぶやきに、眉根を寄せた。

「それはお前の偏見だろ？ 今回のあいつの行動はそう言つことだ。あいつが幸せであったか、心の底から満たされていたか、自分の胸に手を当てて考えてみたらどうだ？」

ディリーラは女神官に背を向けて、さつさと石の上に横になつた。女神官の気配が牢の前から消えて、ディリーラはゆっくりと浅い眠りに落ちていつた。

ディリーラは暗闇の中で夢を見た。

それはディリーラが人の子供として生まれ落ち、物心が付いた頃の夢だった。

彼女はある地主の家で働く、奴隸の娘として生まれた。

両親と兄と他の奴隸達と一緒に、物心付いた頃には家畜の世話を任されていた。

朝から晩まで畠仕事をしたり、牛の世話をしたり、家事をしたり

する毎日。

ディリーアはいつもくたくたに疲れ果て、皆と一緒に床についた。彼女はその仕事が大変だとは感じていたものの、お互い助け合い、奴隸達と一緒にだから何とか今までやってこられた。

ある寒い冬、両親や何人かの奴隸が死んだ。

原因是飢えや寒さから来る病だつた。

後に残された兄や奴隸達は、その時から死んだ彼らの分まで働かなければならなくなつた。

彼女は兄と寝る間も惜しんで働いた。

しかし仕事はいつこうに楽にならない。ついには疲れのため、病にかかるて死ぬ者さえ現れた。

命の危険を感じた彼らは、ある夜、地主の屋敷から逃げ出した。サンザシの塀に囲まれた塀をくぐり抜け、村の外の荒れ地へと走

り出た。

奴隸達の脱走に気が付いた地主は、またたく間に村人を集め、番犬を野に放つた。

逃げ出した奴隸のうち、ある者は番犬にかみ殺され、ある者は村人に捕まり殴り殺された。

彼女は兄に手を引かれ、深い森の中に逃げ込んだ。

暗い森の中を月明かりを頼りに走り続ける。

時々、木の根や岩に足を取られながら、一人は懸命に走った。

しかし背後から番犬や村人の足音が遠ざかる気配は無い。執拗な追跡は続けられ、ついに一人は湖の岸辺に追いつめられてしまつた。

番犬がうなり声を上げ、槍を持つた村人達が周りを取り囲む。番犬の一匹が飛びかかり、兄の腕にかみついた。

「お兄ちゃん！」

彼女は兄に駆け寄り、足元でうなり声を上げる番犬をにらむ。

獰猛な番犬は尾っぽを丸め、耳を垂らし後ずさつた。

それでも村人達はひるまなかつた。

「逃げる」

腕に怪我をした兄が彼女をかばうように、村人達の前に立ちはだかつた。

「早く逃げる」

兄にもう片方の手で突き飛ばされ、彼女は岸辺の岩の上から湖に転げ落ちた。

水しぶき越しに見えた兄の体には、村人達の剣や槍が何本も突き刺さっている。

彼女が悲鳴を上げる間もなく、兄の体は力なく岩の上に崩れ落ちた。

赤い血が岩を伝い、彼女のいる湖まで流れ込んでくる。

倒れた兄が、じぢぢらを見て何事かつぶやいた。

しかし村人のどどめの一突きによってそれは遮られた。

岩の上に横たわる兄の体。

止めどなく湖に流れ込む赤い血。

湖の形に添つて丸く開かれた夜空には、青白い月が煌々と輝いて
いる。

村人達が岸辺から湖の中に降りてくる。

不意に湖面を渡る風が森の木々を揺らし、その葉がざわざわと音
を立てた。

彼女は木々のざわめきのなかに、ある言葉を聞き取った。

「逃げてください。逃げてください」

その声は一つではなく、風が木々の葉を揺らすたびに大きくなっ
ていく。

「逃げてください。逃げてください。水の女神。あなたの心が憎し
みに染まつては、雨は降らず、小川は出来ず、ついには湖さえも濁
つてしまつます」

木々のざわめきを聞いてこじらひ、「彼女はかつて水の女神であ
つた頃のことを思い出してきた。

天上での祝宴のこと、月の神のこと、火の神とのやり取り。もう天上の神々でさえ忘れ去ってしまった、遙か昔のことさえ彼女は思い出してきた。

短剣を持って突進してきた村人の前に、突然水柱が立った。その水柱の水滴は鋭い刃となつて村人の持っていた棒や槍の柄を真つ二つにする。

彼女の瞳に青い輝きが灯り、水の上にゆっくりと立ち上がる。村人の悲鳴、血しぶきを受け、彼女は静かに目を閉じた。気が付けば、彼女の体は銀色の巨大な蛇に変わっていた。

大勢の靴音に目を覚ましたディリーアは、痛む頭を押さえ起きあがつた。

そして牢の前に居並ぶ人々を見てうんざりした。
そこには最初に牢を訪れたロキウスと奴隸達、中年の女神官、フイエルナ姫までもが集まっていた。

「今度は何の用だ？」

ディリーアは不機嫌に尋ねる。

「の方を、クロフ様を助けていただきたいのです」
フイエルナ姫が鉄格子に歩み寄った。

「魔女の力を借りるのはしゃくだが、あいつの状態は普通ではない。怪我は治っているはずなのに、魂が呼び戻せないのだ」
ロキウスは悔しそうに杖を握りしめる。

「彼を助けられるのは、あの子の心を呼び戻せるのは、あなたしかいないのです」

中年の女神官はうつむき、ディリーアに頭を垂れる。

「どうか、クロフ様を助けてください」

「お願いします」

「お兄ちゃんを助けて」

「奴隸達が頭を下げる。」

ディリーアは痛む頭を押さえ、牢の前の人々を見回した。

「わかった」

ディリーアは長いため息とともに立ち上がった。

ディリーアは女神宮に案内され、その部屋に足を踏み入れた。
部屋の奥にある寝台には、目を閉じた一人の青年が横たわっている。
顔色が青白いことをのぞけば、まるで眠っているかのよつだった。

「あいつ一人のために、こんな大勢が集まっているとはな」
その部屋には王や家臣、城の主要な人物が集まっていた。
そして寝台の枕元には青い衣をまとった人影が人々から離れて立つている。

人影は風に揺れる柳のように、寝台のクロフをじっと見下ろしていた。

ディリーアは部屋の入り口で立ち去りしたまま、ちらりと青い衣の人影を盗み見た。

「部屋に、月の神の使者が来ているな」

前を歩く女神官に小さく耳打ちする。

女神官の驚きが背中越しに伝わってくる。

「あそこだ。寝台の枕元に、クロフをのぞき込むように立っている」「ディリーアは痛む頭から指を放し、平静な面持ちで部屋に足を踏み入れた。

ディリーアの後ろをロキウスやフィエルナ姫が続く。

寝台の枕元まで来たディリーアは、ちらと月の神の使者を視界の端に留めた。

その瞬間、ディリーアは吐き気さえもよおす、激しい頭痛に襲われた。

「邪魔をするな」

月の神の使者は青い頭巾の下から、獣にも似たうなり声を上げる。雪原を渡る北風のように、その声を聞いてディリーアはぞっとした。

ディリーアは気丈にもにらみ返す。

「お前はどういう理由あって、こいつを連れて行こうとするのか」「女神官やロキウス、周囲の人々の息を飲む気配が伝わってくる。

「この者の死が近いからに決まっておろう。地上で死んだあらゆる魂は、等しく地下におわす月の神の御前に連れて行くのが、我々の役目だ」

ディリーアの頭に激しい痛みが走る。

月の神の使者の姿も、発した声も周囲の人々には全くわからないらしく、部屋中の視線はクロフの枕元に立つディリーアに注がれている。

「しかし、こいつは死に瀕しているものの、体は至って元気だ。死んだ者でなければ、死の国に連れて行くことが出来ないはずだが？」

ディリーアは精一杯気持ちを奮い立たせる。

そうして少しでも気を強く持つていないと、頭の痛みで氣を失つてしまいそうだった。

「そうだ、お前の言つとおりだ。それ故、こいつの魂が肉体を離れ、本当の死を迎えるのを待つているのだ」

使者は青い頭巾の下から、風がうなるような低い声で笑う。

「こいつの死後の罪は重いぞ。何しろ、天から与えられた命を自分の手で吹き消そうとしたのだから。月の神の審判の後、死の国での責め苦は免れないだろ？」

くつくともおかしそうに笑う。

ディリーアは月の神を思い出し、よけい腹が立つた。

「ふん、しかしそれは今ここでこいつが死ねば、だろう？　まだ助かる見込みはあるのだから、そつ考えるのは気が早いのではないか？」

？」

青い影がゆらりと揺れる。

月の神の使者はディリーアに顔を近づけた。

使者が人の姿を取つていても、頭巾の下には目も鼻も口もなく、光さえ吸い込んでしまいそうな真っ暗な闇が広がっている。

「口の減らない娘だ。お前とて、生きる上で必要のない多くの命をつみ取つて来たではないか。死の国でお前の犯した罪がどれほど重いか、その身をもつて思い知るがいい！」

ディリーアは耳の奥で大鐘が幾つも鳴つているかのような、激しい頭痛に襲われる。

目の前の景色が揺らぎ、ディリーアは絨毯の上に座り込んだ。
「そんなこと、言われなくともわかっている。ならば、こいつの代わりにわたしの命を月の神の元へ持つて行けばいいだろ？　こいつはまだ、この地上に必要な存在だ！」

月の神の使者は氷のような聲音で言い放つ。

「必要か必要でないかは、我々の関するところではない。それを決めるのは地下におわす月の神をはじめ、多くの神々達だ」

部屋に集っていた人々は、ディリーアが怒鳴り散らしているのを目にして、気が狂つてしまつたのかと考えた。

ディリーアはやがて諦めたように長い息を吐き出した。

「下つ端では、話にならんか」

ディリーアは痛む頭を押さえ、すつと立ち上がった。

そしてこんどはクロフの寝台に身を乗り出す。

「まだ月の神の使者の手に、その魂が渡つていないと言つことは、そこにいるのだろう、クロフ。わたし達のやり取りが聞こえているのだろう? いつまでそのまままでいるつもりだ?」

ディリーアは青白いクロフの顔をのぞき込む。

「お前は、わたしを助けると言つておきながら、自分はこの様なのが? 死んでもいいと思っているのか? ふざけるな!」

ディリーアはクロフにつかみかからんばかりの勢いで叫ぶ。

「お前はどうして死を選ぶ。生きようとしない。お前が生まれながらに火の神の宿命を背負っているからか? その重荷に耐えられなかつたからか?」

ディリーアは月の神の使者が傍らにいるのさえ忘れ、周りに人々がいることさえ忘れてしまったかのように、今までため込んでいた気持ちを吐き出した。

「そんなもの、何もかも投げ捨ててしまえばいいだろう! お前がそうできなかつたのは、その優しさのせいか? 周囲の人々の期待を背負つてのことか? わたしはそんなもの知らない。理解できない。しかし、その命はお前のものだろう? その一生はお前のものだろう? お前には、支えてくれる人間がいるだろう。悩みを聞いてくれる人間がいるだろう」

ディリーアの両目から大粒の涙がこぼれ落ち、クロフの頬にしたたり落ちる。

「悲しければ泣けばいい。苦しければ頼ればいい。つらければ逃げたつていい。お前が望むように、もっと自由に、好きなように生きていけばいいんだ」

ディリーアは涙をこぼしながら、クロフの胸にすがりついた。

「お前はわたしのように、人間に絶望して闇にとらわれ、化け物の姿になつたわけではないだろう？　ならば人間に希望を持っていると言つことだ。お前は、精一杯人間のために尽くそうとしたではないか。わたしを助けようとしたではないか。お前はわたしとは違う人のために生き、人と共に生きていけるだろう？　わたしのことは捨て置けばいい。お前はお前の望むように生きればいいんだ」

ディリーアはクロフの額に手を置いて、優しく語りかけた。

「帰つてこい。お前の戻るべき肉体はここだ。お前の帰るべき場所はここだ。帰つてこい。お前を大切に考える者達のところへ」

するとクロフの枕元に立つていた使者の影が揺らめいた。

月の神の使者は一度クロフの顔をのぞき込むと、炎が揺らめき吹き消えるようにどこへともなく去つていった。

使者の気配が遠ざかり、ディリーアは安堵のため息をついた。

「月の神の使者は去つたようだな」

ディリーアがつぶやくと、後ろに控えていた女神官が真っ先に枕元に駆け寄つた。

クロフにすがりつく女神官の喜ぶ様子を見て、ディリーアの憔悴しきつた顔にも優しげな笑みが戻る。

フィエルナ姫が駆け寄り、ロキウスが枕元に歩み寄る。

ディリーアは数歩後ろに下がり、クロフの無事を喜んでいる彼らを遠巻きに見つめていた。

寝台に横たわっていたクロフが身じろぎ、つっさりとまぶたを開ける。

「おい」

ディリーラの肩が後ろに強く引っ張られ、頭に鈍い衝撃が走る。そしてそれきり田の前が真っ暗になった。

暗い空に青い月が浮かんでいた。

クロフは星一つ出でていない夜空を見上げ、次いで地上に田を落とした。

青い月に照らされたなだらかな丘は、地平線の彼方まで続いている。

その上を細い道が蛇行し、流れる川のよつに続いている。クロフはふらふらと重い足を引きずるよつて、白い道を進み始めた。

どこか行くべきところがあつたよつな氣がする。
ぼんやりとした頭で考えた。

あの丘の向こうへ行けば、思い出すだろつか?
クロフは白く霞む頭でそう考え、黙々と歩き続けた。

一つ田の丘を越え、二一つ田、三三つ田の丘の頂に立つたとき、クロフは崖の下に白いリンボクの林が広がっていることに気が付いた。リンボクの白い枝には鋭い刺があり、クロフの行く手を阻むよつに密集して崖の下に生えている。

クロフは崖を滑り降り、リンボクの林の前にやつてきた。
林に近づくと、鋭い枝がまるで意志を持ったかのように道を開いた。

クロフは暗い空を見上げた。

空には青い月がクロフを見下ろすよつに浮かんでいる。
気のせいか、最初に見上げたときよりも青い月が大きくなつてゐるようと思える。

どこか、戻るべき場所があつたよつな氣がする。
クロフは林に入るのをためらつた。
どうしてかわからないが、その林に入つてはいけないよつな気がしたのだ。

青白いリンボクの枝が風もないのに揺れている。
枝のこすれ合う音が、人のささやき声のよつに冷たく響く。
クロフは急に空恐ろしくなつた。

黒い梢にかかつた月は、静かに青い光を投げかけている。
クロフは背筋が凍り付くような気がして、せわしなく辺りを見回

した。

クロフの不安をあおるよつゝ、リンボクの林は物音一つ立てず、ひつそりと静まりかえつてゐる。

耳が痛いほどに静寂が青い世界を支配する。

クロフが不安に駆られ後ろを振り返ると、何人かの男女が足音もなく歩いてくるのが見えた。

クロフはわずかに安堵した。

その人々は、ある者は美しい服を着て、ある者はぼろをまとい、

それぞれリンボクの林の方へ歩いてくる。

顔かたちがはっきりと区別出来るところまでその一団が近づいてくると、クロフはあつと息をのんだ。

美しい服を着た者も、ぼろをまとった者も、腕や足、肩や頭にひどい怪我を負っていたのだ。

彼らの背後からは、また別の一団がやつて来る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3275y/>

赤と青の神話 二章

2011年12月5日19時57分発行